色彩教材研究会通信　No.473　2025.12.18
発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●古伊万里に思いを馳せて

先日、日本色彩学会関東支部の見学会で戸栗美術館（渋谷区松濤）を訪ね、「古伊万里カラーパレットー絵具編ー」を鑑賞しました。夏秋連続企画展示の後期展示である本展は、伊万里焼の装飾のうち絵具による「色」に注目した展示でした。陶磁器の世界に無頓着な私には、学芸員の方の解説を伺いながらの鑑賞は、印象深いものになりました。下絵付け（したえつけ）の青、そして上絵付け（うわえつけ）のカラフルな絵具使いによる装飾が、磁肌の白色に重なることで、厚みが生まれ何ともいえぬ豊かさを醸し出しているのです。

伊万里焼（磁器）は江戸時代に肥前国有田で焼かれ始め、17 世紀後半の伊万里焼は「古伊万里」と呼ばれるとのことです。陶工の手による古伊万里は、大名や富裕層向けの豪華な献上品や庶民向けのものまで幅広い製品が作られていたとのこと。見ごたえのある展示内容であったとともに、豪華で貴重な芸術作品としての側面と、庶民の生活に溶け込んだ優しい器としての側面を持ち合わせていると懐想することができたことも魅せられた一因です。会期は 12 月 21 日（日）までです。　（監事：井澤尚子）

●日本の伝統的な色名ー橙色

橙は伊豆半島や紀伊半島が主産地のみかん科の柑橘類で、その多くは正月飾り用に使われている。

初夏に白い花が開き、冬に果実が黄熟した果実の色は橙色と呼ばれる。

冬期に橙色となるが、収穫せずに残しておくと木から落ちず、翌年の夏にはまた緑色に色づき、再び冬が来るとその実は橙色になるので回青橙とも、回橙色とも言われる。

実が木についたまま年を越すところから「代々」として縁起を祝い、正月飾りに用いる習慣が生まれた。

奈良時代の柑橘類の総称であった橘は、万葉集に二十二首も登場し、貴族の庭木として植えられ白い花や、木が愛でられたが、橙は万葉集には一首も無い。橘は、貴族には珍重されたが、庶民にはおおきな実がなり、食用になった橙が生き延びたのであろう。

新しい色名が出来る場合はこのように理由と前後があるが、さらに遡れば、その民族のもつ基本的な原色にたどり着く。

日本民族の場合、重要な原色の赤と黄の間の色を橙色として、虹の色を赤橙黄緑青藍紫の七色にしたが、虹色を六色とする民族も多い。　（永田泰弘）

●大辞泉ひろい読み　103- し

塩築地：しおついじ。壁面に数本の白い筋を水平に入れた築地塀。

紫苑色：襲の色目の名。表は薄紫青、裏は青、または、表は蘇芳、裏は萌葱。秋に用いる。

紫外線：しがいせん。可視光線のスペクトルの紫色部より外側にあって目には見えない光線。波長は 1 ～380 ナノメートル一程度で、可視光線より短く、x 線より長い。太陽光線・水銀灯の中に含まれ、殺菌作用をもつ。また、大気中の酸素と反応してオゾンを発生する。

視角：物体の両端から目までの二直線が作る角度。目に見える物体の大小はこの角度の大小による。物をみる角度。見る立場。視点。

視覚：光の刺激を受けて生じる感覚。網膜に光が当たると視細胞に興奮が起こり、視神経を通して大脳の視覚野に伝えられ、明暗・光の方向や物の色・動き・距離などを認知する。五感の一。

視覚器官：しかくきかん。光の刺激を感受し、物を見る事に関係する器官。視細胞からなり脊椎動物では補助装置も発達して目となるが、無脊髄動物では体表に散在するものや高度に分化したものもある。視覚器。

視覚野：大脳皮質の後頭葉にある。

＊大辞泉：小学館発行国語辞典　（永田泰弘